

社会変動を超克する技法

—エチオピア南部牧畜民ボラナの口頭年代史における 予言者に関する語り—to焦点をあてて—

大場 千景

総合研究大学院大学 文化科学研究科 地域文化学専攻

エチオピア南部のサバンナ地帯に居住するボラナの人々の間では、かつてラーガ (*raaga*) と呼ばれる予言者が存在していた。予言者は、口頭伝承の中で、天災、内紛、移住、近隣のエスニック・グループとの紛争やエチオピア帝国からの侵略や支配などの出来事と関わりながら、出来事の因果律を説明したり、予見や警告を行ったりしてきた人々であると語られる。本稿の目的は、予言者に関する伝承がボラナの人々が自らの「歴史」を構築する上でどのような役割を果たしてきたかについて明らかにすることである。

1章では、東アフリカを中心とした予言者に関する人類学的研究を概観しながら、従来までの予言者の実像とその社会的役割を明らかにしようとする研究ではなく、人々の間でリアリティをもって語られる予言者や予言に関する言説のもつ社会的、宗教的あるいは歴史的意味の探究に焦点をあてた新しい研究の流れの中に本研究を位置づけた。2章では、予言者に関する様々な伝承を検証しながら、ボラナ社会において予言者の活動は共同体の倫理を定義、維持するものであり、共同体の慣習に関するいわば検閲者のような位置づけに予言者があることを明らかにした。3章では、過去の出来事に関する語りの中に登場する予言者たちが、それぞれの時代でどのように描写されてきたのかについて記述した。事例として、17世紀中葉に起こったとされる大移住、18世紀初頭に起こったとされるオロモ系牧畜民アルシとの紛争、19世紀中葉に起こったとされるガダの父と世代組との深刻な対立および世代組が全滅したアルシとの紛争、19世紀後半に起こったとされるボラナ社会全体を巻き込んだ大規模な内紛、19世紀末のエチオピア帝国による侵略、これらの出来事に関する語りを取りあげた。

予言者たちが登場する語りにも共通して見られるパターンは、予言者が予言したり、人々に助言をしたり、呪術を施したりしていた背景にはすべて社会を震撼させたカタストロフィックな出来事があったという点と、カタストロフィーは予言者の予言や呪術によって超克されていくという筋書きであった。筆者はこの予言者の予言や呪術によるカタストロフィーの超克を「予言・呪術成就史観」と名付け、社会変動に対して予言者たちの予言や呪術という挿話を差込むことで、偶然的な出来事を必然的な出来事へと転換させようとする絶え間ない解釈活動をボラナの人々の歴史実践の1つとして考察した。

キーワード：オロモ系牧畜民ボラナ、予言、予言者、言説空間、口頭年代史、歴史実践

- | | |
|---|--|
| 1. はじめに | 3.2 事例2 32代目アルシとの大紛争 (c. 1704-1712) |
| 1.1 研究目的 | 3.3 事例3 50代目ジャルデッサ・グヨと世代組の対立とその結末 (c. 1848-1856) |
| 1.2 調査地概要 | 3.4 事例4 53代目ティロ・ワラーバ (c. 1872-1880) |
| 2. ボラナにおける予言者に関する多様な言説 | 3.5 事例5 55代目エチオピア帝国のボラナ征服 (c. 1888-1896) |
| 2.1 予言者たちの能力の由来 | 4. 予言・呪術成就史観 |
| 2.2 予言者たちの予言 | 5. おわりに |
| 2.2 予言者たちの喪失と復活 | |
| 3. 口頭年代史に登場する予言者物語り | |
| 3.1 事例1 26代目アッバイ・バツボとモロ・ウチュマ (c. 1656-1664) | |

1. はじめに

1.1 研究目的

東アフリカの諸社会において、未来を予見し、社会に影響をもつ予言者に関して、人類学者によって様々な報告がなされてきた。ベルナルディヤリーンハートはメルやディンカ社会において予言者が土着の神の代弁者として準宗教者の機能を果たしていることについて、エヴァンズ＝プリチャードは植民地政府への抵抗運動の動因者として予言者を記述している (Bernardi 1959; Lienhardt 1976; エヴァンズ＝プリチャード 1995)。これらの初期の研究は、旧約聖書に登場し、神の代弁者であるとともに、社会の危機的状況において社会に警告や助言をしてきた預言者たちの像を東アフリカの予言者たちに投影してその社会的役割について考察する傾向があった (Anderson 1995)。

20世紀後半になると、口頭伝承をもとにした予言者に関する記述が増えていく。ランフィアーは、トゥルカナの初期抵抗の歴史の中で予言者がどのような役割を果たしたかについて (Lamphear 1992)、バーンセンは、19世紀のマサイ社会の中で、戦いの指揮者となっていた予言者に関して記述している (Berntsen 1979)。これらの研究は、実際に予言者たちがどのような活動をしてきたのかについて口頭伝承をもとに再構成しながら、彼らの社会的役割を明らかにす

ることに焦点をあてたものであった。

口頭伝承や行政文書を用いて南スーダンのヌエル社会における予言者や予言について記述したジョンソンは、予言者と予言に関する研究は、本質的に歴史的なものであり、同時代の関心と土着の歴史の両方に焦点を当てることができる対象であるとする (Johnson 1994: viii)。彼の研究は予言者や予言の分析を通してそれぞれの社会が「真実」であると認識しているものを探求し、人々の「真実」への理解の移り変わりを記録していくなかで、ヌエル社会における宗教の変容を追跡するものであった。同じくヌエルの予言者たちの予言について調査を行っている橋本は予言の再構築という問題に着目し、19世紀に出現しヌエル社会に流通しはじめた予言者ングンデンの予言が20世紀の出来事を通じて刷新され続けながら、現在のヌエル社会の中においてもリアリティをもって共有されているということを報告している (橋本 2011)。

本稿は、これまでの予言者研究が行ってきた予言者の実像および、その社会的政治的役割について追求するというよりも、ジョンソンや橋本にみられるような予言者や予言という言説がどのように人々から解釈され続けられながら社会において流通してきたのか、そしてそれらの言説が社会にとってどのような存在意義をもってきたのか、という観点から予言者に関する人々

の語りを読み解こうと試みるものである。特に本稿では予言者言説の社会における存在意義として、ローカルな「歴史」を構築する骨組みとしての予言者言説という点に焦点をあてながら論考を進める。

ボラナ社会では、ラーガ (*raaga*) とよばれる予言者を主人公とした歴史物語りが流通している。過去に関する人々の語りの中で予言者たちは、ボラナ社会で起こってきた天災や内紛、他のエスニック・グループとの紛争に関して人々に予言をしたり、引き起こされた事態を收拾する方策や敵との戦い方などについて助言をしたりしている。ボラナ社会を揺るがす重大な事件が起こるたびに予言者は登場し、語りの中でボラナ社会の命運を左右する重要な役目を担ってきた。本稿では口頭年代史を通して執拗に登場する予言者たちに関する具体的な語りを取りあげながら、ボラナの人々が自らの「歴史」を構築する上で予言者物語りが果たしてきた役割について明らかにする。

1.2 調査地概要

本稿の対象となるボラナとよばれる人々はオ

ロモ語を母語とし、エチオピアのおよそ3分の1の人口を占めるオロモとよばれる国内最大エスニック・グループの一分派である。ボラナは首都アデイス・アベバから700キロメートル南下したケニアとの国境付近に広がるサバンナ地帯に居住している。2007年のエチオピア政府の人口統計によると、ボラナ自治区の人口は378,848人である¹⁾。現在ボラナの大多数は牛、ヤギ、羊、ラクダを放牧しそのミルクを主な食料源とする牧畜生活を営んでいるが、20世紀後半に頻発した早魃の影響によって徐々に所有頭数を減らしており、牧畜のみならず雨期を利用しての小規模な農耕を行うようになっている。また、近年の定期市の広がりとともに年に数回家畜を売却し穀物を購入するということが生活の中に定着してきている。

ボラナ社会は19世紀末においてエチオピア帝国からの侵略をうけるまで、ガダとよばれる世代階梯制度を根幹とし極めて自律した社会を形成してきた。ガダには全部で8つの世代階梯がある。社会全体における政治と儀礼に責任をもつ階梯である第6番目のガダ (*gadaa*) 階梯は8年間であり、この階梯からガダの父 (*abbaa-gadaa*)

		ガダモツジ儀礼 (階梯からの引退)
8	ガダモツジ階梯	1年
7	ユーバ階梯	34年
		オダの儀礼 (ガダの役職者引退・ヤーの村の解散)
6	ガダ階梯	8年
		バツリの交換儀礼 (ガダの父の立位)
5	ドーリ階梯	4年
4	ラーバ階梯	4年
		ドキス儀礼 (婚姻許可)
3	クーサ階梯	8年
		ガルマ・カラチャの儀礼 (役職者就任式)
2	ガンメ階梯	16年
		ゴディーヤ儀礼 (6人の役職者の選出)
1	ダツバレ階梯	8年
		命名の儀礼 (男児の命名)

図1 世代階梯と通過儀礼

とよばれるいわばボラナのリーダーが選ばれる(図1参照)。ガダの父はガダ階梯に所属する8年の間、ボラナ全体の政治や儀礼の執行に責任をもつ。ボラナはその8年ごとにかわる3人のガダの父の中でもアルポーラのガダの父 (*abbaa-gadaa-arboora*)²⁾とよばれる人物の名前を記憶し、各ガダの父が在位する8年間という時間をアルポーラのガダの父の名を使って「誰々のガダの時 (*gisee gadaa X*)」と言ったように呼ぶ(Annex参照)。現在までに70人のアルポーラのガダの父が立ってきたとされ、人々はその70人のガダの父を立位順に並べて記憶し、それぞれのガダの父の在位した8年間に起こった出来事を語る。本稿ではこのガダの父の系譜に従って編年化された語りを口頭年代史と呼ぶ。

筆者は2007年8月から12月、2009年6月から2010年1月、2010年6月から7月、2011年7月の計16ヶ月において、広域にまたがって居住している46人の人々から口頭年代史を中心とした口頭伝承の聞き取りを行った。そして語り手との対話時に録音した語りの一部を一言一句かえることなくテキスト化した。本稿は予言者についてより詳細な伝承を語った18人の語り手たちから収集した語りを取り上げながら、論考を展開していく。

2. ボラナにおける予言者に関する多様な言説

予言者たちが登場する歴史物語りを取り上げる前に、まずは、予言者にまつわる様々な言説を検討しながら、ボラナ社会における予言者の位置づけについて明らかにする必要があるだろう。

2.1 予言者たちの能力の由来

現在ボラナ社会には、妖術師 (*falfaltuu*) や精霊憑依者 (*ayyaana*)、家畜など無くし物をした場合に所有者の依頼によって盗人に呪いをかける者 (*eebbiftuu*)、蛇を自由に操って人を殺めたり助けたりできる者 (*warra-buutii*, *Jaartii-karraayyuu*, *warra-bofa*, *leemmani*)、星から政治、

天災などを占う者 (*ayyaantuu*)、家畜の腸から紛争や天災などを占う者 (*uuchuu*)、夢から吉凶を占う者 (*oobjuu*)、噛み煙草やコーヒー豆から吉凶を占う者 (*yuuba*) など超常的な力をもつ人々が存在している。

予言者 (*raaga*) は超常的な力を持ち上記の占い師たちのように様々な方法を使って天災や紛争などの先見をしたり、社会のあり方や紛争に関する助言をしたり、強力な呪術を使うことができたとされる。そうした能力をどのように得たのかということについての伝承がいくつかある。

数ある有名な予言者のうちの1人でボッデという名の予言者がいる。ボッデの一族はリネージュをとおして予言の能力を継承してきたとされ、現在でもその子孫は自身を予言者と名乗り、噛み煙草やコーヒー豆を使って占いをしている。このボッデが予言の能力をいかにして得たのかについてボラナの人々の間で広く知られている語りがある。ボッデの母はボッデを宿したまま死んで埋葬された。死後墓の中で彼女から女と男の双子が産まれた。子供たちが墓から出て遊んでいるところを目撃した人々は予言者にどうすべきか相談した。予言者はイディという名の実をいくつも転がして子供たちが遊びながらそれを拾い集めている隙に捕まえろと言った。人々は男の子を捕まえが、女の子は墓の中に消えた。捕まえられたこの男の子がボッデであり、墓に消えた女の子がボッデに予言の能力を与えた。現在に至るまでこの墓に住む女の子がボッデー族に様々なことを告げているとされ、人々はボッデー族のことを死霊の予言者 (*raaga-hekeraa*) と呼ぶ。

19世紀の後半に実在したボル・ジロ・ワレという名の予言者がいる。その孫にあたるブルジが語ったボル・ジロ・ワレの予言の能力の由来も死霊と関係がある。ボル・ジロ・ワレは結婚の申し込みに遠方の村に出かけた。道中暗くなり、見知らぬ村に泊めてもらうことになった。彼はミルクや肉をもてなされたがいっこうに腹

が膨れなかった。次の日起きると昨晚の村は消え、彼は廢墟のなかに寝ていた。彼は死靈 (*hekeraa*) の村に泊まり、もてなされている間に予言の能力を授けられたのだという。

現在多くの語り手は、予言者はボラナの土着の神であるワカ (*waaga*) の力をその源としている、あるいは、ワカの媒介者であると語る傾向にあるが、この2つの予言者に関する伝承は、予言者の超常的な力はワカよりも死靈に由来しているということを示唆している。

2.2 予言者たちの予言

予言者たちは過去に生じた出来事に関する語り登場するだけでなく、そうしたコンテキストから離れて、彼らが発話したとされる予言 (*imana*) 自体が寓話や謎かけや詩の形で伝えられている。この節では実際にそれらの予言に関する語りを事例としてあげながら、予言者たちの予言が人々の間でどのように言説化されているのかについて考察する。

まずは17世紀に存在したとされボラナの最初の予言者と言われているモロ・ウチュマの物語りを概説する。以下は語り手の1人であるグフが語った物語りを要約したものである。

30人のボラナは、儀礼に関して助言をもらうためにモロ・ウチュマのところに出かけた。その途中奇妙な光景を目にする。一行が川の近くにやってくると、川には大蛇がいてその川は大蛇の口から入って尻から出て行き、その川はいくつかに分岐していて、その1つが林の中を流れているという光景を目にした。その川を渡ると犬がいた。犬は子を身ごもって寝ていた。腹の中で胎児が吠えていた。それから人々は雨が降って緑にあふれている土地についた。そこにいたイノシシは草を食べているが痩せている。今度を雨が降らず草木の生えていない所にやってきた。しかし、ロバは顎に肉がついている。ヤギや子牛も太っ

ていた。そして人々はモロ・ウチュマの一族の所にたどりついた。村ではモロは放牧、モロの妻は水場に行っておらず2人のモロの息子がいた。2人とも起き上がることもできない老人だった。モロ・ウチュマは牛の放牧から帰ってきたがとても若い。人々が彼に儀礼について尋ねようとする、モロは私のところに来る途中で何を見たのか?と人々に尋ねた。人々がそれまで見てきた光景を話すと、モロはそれぞれの奇妙な光景が意味することを解説する。

ここまでの寓話めいた物語を長々と語ってきた語り手のグフは、このモロの解説自体を彼の予言であるとし、彼自身の解釈を交えながら、モロの予言について語る。

大蛇の口から入った川が尻から出るというのは、カッル³⁾の人々が紛争に巻き込まれるということだ。カラユクラン、オデイトウクラン、マターリクランでカッルは5人いる。これらの人々に紛争がふりかかるということだ。もう1つの林の中へと抜けていく川はカッルと対立しない人を意味する。林をぬける川は途絶えない。カッルと対立する人々、大蛇の体の中に入っていく川は途絶える運命にある。川の近くで寝ている妊娠した犬の腹の子供が吠えているというのは、腹の中にいるのは雄と雌だ。胎児が母親を扶養するようになる。娘が母親に口答えをする。息子が父親に口答えをする。息子や娘が両親を扶養するようになるということだとモロは予言した。小さな子が私を扶養する。指示する。例えば今日 NGOの若者が会議を開いているが、彼らは我々に指示を与える。胎児の犬、オスとメス、若い奴らが私に指示を与えている。大蛇の口に入る川が尻から出るというのは、ちょうどカッルに指示を与えていた前政府のことだ。その政府はいまやいない。これがモロの予言

である。草の恵まれた猪がやせるとは、金に恵まれた人々が痩せるとのことだ。金は人々に幸福を与えない。早魃のような状態にさせる。金のたくさんある所に移住するということは、早魃状態のところに行くということだとモロ・ウチュマは予言した。雨は草をもたらす。草のあるところに人々は移住する。雨期によい草が生えなかったら？それは早魃と同じことである。モロの村にいくと父親は放牧中、母親は水場に行っていて、息子たちは老いて戸口に戸を立てている。これは現在モノを知る老人がいなくなったということだ。老人が拒絶されていなくなってしまった。老人はワカに様々なことを尋ねる。もし問題があれば人々は老人に聞く。しかし、今ボラナに物事を知る老人はいない。(グフ・ボッジより2009年7月収録)

グフは寓話的な物語を元にモロの予言について語っているが、語り手のグラーチャは、19世紀の予言者たちの1人であるワリオ・ウダテは、イッボイヤ (*hiibboyyaa*) と呼ばれる言葉遊びの形で予言を残したとする。

イッボイヤとは韻を踏んで定型化した謎かけであり、その読みと答えはあらかじめ設定されているものがほとんどである。しかしながら、ワリオ・ウダテのイッボイヤとされるものは、多義的で聞くものに対して様々な解釈の余地を残す。グフの語りにもみられるように語り手たちは、現在の社会状況を省察しながら予言とされる言葉の意味を構築している。グラーチャによるワリオ・ウダテのイッボイヤ解釈を事例としてあげながら「予言者たちの予言 (*imana-raaga*)」とその解釈の在り方についてさらに考察しよう。以下にあげているのが、ワリオ・ウダテの予言的イッボイヤであるとされているものである。

Arbi dhaattuutti dannabse, warseessi nama hin

nyaanne funnaani dhayee keesaa utaale.

攻撃的な象が人々の近くに立つとき、人を噛まないサイが鼻を鳴らし、とおりすぎていく。(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

グラーチャによると、人々の近くに立つ攻撃的な象とは町場のメタファーであるという。また、人を噛まないサイは自動車を指しているという。ボラナの町場は道路上に沿って立てられており、家々が立ち並ぶ道路を自動車が騒音を立てて走り去る様を表していると解釈している。

この予言をしたとされるワリオ・ウダテ自身は20世紀初頭には死亡しているが、20世紀初頭のボラナにおいて道路や町場があったという記録はない。自動車道路が作られるのはイタリアによる植民地期(1935–1941)においてであり、道路に沿って人々が集住するようになったのは1940年代以降からである。このイッボイヤ解釈にはグラーチャ自身の町場での観察が反映していると考えられるが、彼はあくまでもワリオ・ウダテによって過去のある時点で発話した予言が実現したとしてこの句を語る。市場の登場を予言したとされるイッボイヤもある。

Miyyuun isani bulchuu dadhabdee, miyyuu qabate adaala diimaan mare.

多くのものであふれても満足しない。その代わりに、何もない土地だけがある。(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

現在ボラナには定期市が存在し、市日には多くのモノと人で溢れかえっている。それ以外の日は何もない空き地が広がっている。グラーチャはこうした市場の光景を詠んだ句であると解釈する。「ボラナは多くのモノであふれても満足しない。ただ、何もない土地で穀物を買うということだ。現在、人々は、ミルクを町場で売り、穀物を買う」(グラーチャの語りより引用)。このイッボイヤ解釈には、現在の定期市でみられ

るようなボラナのせわしない経済活動への観察が反映している。

以下は、ボラナ社会に流入した新しい物質文化として紙に関するイッボイヤであるとされる。

Boorana kalloo adii dura qabani, kalloo adii gulaa yaa'e, waan adii guurratu argee.

子牛の白い皮を掲げて、これに人々が近づく。そしてまた別の子牛の白い皮を受け取る。(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

グラーチャの解釈によると、子牛の白い皮 (*kalloo-adii*) とは紙を指し、別の子牛の白い皮とは穀物を隠す袋のことを指しているという。オロモ語のボラナ方言でカロ (*kalloo*) というのは病気で死んでしまった子牛を意味する。ボラナは子牛が死んでしまうとその皮を乾かし、母牛においを嗅がせて搾乳する。母牛は子牛の皮をかざしてよぶとやってくる。グラーチャは母牛が子牛が死んだという事実をなにも分からずに近寄ってくるように、ボラナも紙をかざすと紙に近寄ってくるようになるということを予言していると解釈する。ここには紙を単なる物質としてではなく、人々を絡めとる力をもつ物質とする認識が現れている。

ボラナが新しい物質文化だけではなく、外部の権力に絡めとられるようになったことを示すイッボイヤとしてグラーチャが語ったものもいくつかある。

Warra waraani fuisse, aduun fiiga dhoorte.

人々は紛争の中で生き抜くことができるが、熱い太陽の下では生き抜くことができない。(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

ボラナはかつて近隣のエスニック・グループたちと戦ってきた。紛争の中で、死んでしまう人もいただろうが、戦いの中で生き抜いて生還することもできる。これが前半部分の解釈であ

る。後半の「熱い太陽の下では生き抜くことができない」という部分を早魃と解釈しても通りそうなものである。しかしながら、グラーチャは、熱い太陽とは政府を指しているとする。彼はボラナは紛争から生きてかえることができるが、戦いの中で殺人や略奪を犯したものを国家の法律によって捕まえようとする政府の役人からは逃れることができないのだと解釈する。このイッボイヤ解釈には、国家の法がボラナの法を凌駕しつつあるとする認識がみられる。

ところで、語り手ワコ・ボンジャはこれと同様の謎かけをワリオ・ウダテではなくガダの父の予言という形で言及している。ガダの父が45代目の時 (c. 1808–1816) にアルボーラ、コニトゥ克蘭、アワトゥ克蘭の3人のガダの父がイッボイヤの形式でボラナの未来を予言したとする語りがある。その中で当時のガダの父であったサーコ・ダダチャはこれと類似したイッボイヤを発話したとされる。

Warra ibiddi guba aduun fiiga dhoortee, ibiddi hambise aduun fiiga dhoortee.

火に焼かれた人々が太陽の暑さによって死んだ。火では死ななかつたのに、太陽は人々を殺した。(ワコ・ボンジャより2010年1月収録)

ワコ・ボンジャはこの句の解釈を、「火とは敵のことである。敵はボラナを攻撃するがボラナは死なない。人々を殺す太陽とはボラナ自身のことだ。役職者に関することでボラナは仲たがいをして殺しあう。ボラナは太陽でボラナ自身を殺す」(ワコ・ボンジャの語りより引用) とする。太陽を政府としたグラーチャに対し、ワコ・ボンジャは太陽をボラナ自身であるとし、この双方の解釈の違いがまったく違った「予言」を生み出している。

Fardi birrii oolu huqqatee, harreen barbadaa ooltu gabbatte.

よい草に恵まれた馬が痩せて、草に恵まれな
いロバが太る。(グラーチャ・ゴダーナより
2007年9月収録)

グラーチャは、このイッポイヤをボラナ内部
での権力構造の変化について予言したものであ
ると解釈する。前述した語り手グフの語ったモ
ロ・ウチュマの物語りの中にもこれと類似した
内容のことが言及されている。グフは「草に恵
まれた猪がやせて、草に恵まれぬロバが太る」
と語ったが、このことをグフは「金に恵まれた
人々が不幸になり、金には恵まれぬが幸福に
生きる人々もいる」と解釈した。一方でグラ
ーチャは良い草に恵まれた馬とはもともと伝統
的に権力を持ってきた人々を指し、草に恵まれ
ぬロバとは権力の伝統の周辺にいた人々を指し
ているという。後者が前者を押しつけて力をも
つということを示していると解釈している。そ
れまで権力の周辺にいた人々や若者たちが教育
を受け政府の役人になって行くことで力をもつ
ようになるという現象が現在起きており、そう
した現状認識が解釈に反映していると思われる。

こうした新しい権力の台頭といったような現
状を前にしてボラナ社会の伝統からの乖離と価
値観の揺らぎを詠んだイッポイヤがある。

Aadeen qoraami taate, aadaan qora taate.

アーデが薪になり、アーダが会議になる。
(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

アーデ (*aadeen*) という名の木は歯を磨く時
に用いるが、薪としては使わない木である。彼
はそうした木が薪になるようなあべこべな時代
がやってきて、慣習 (*aadaa*) が会議の中で決め
られるようになると彼はこの句を解釈する。「も
し、何か慣習であるならば、人々は話し合い
をすることなく一致する。現在の「慣習」は、
話し合いで決められかつての慣習を消し小さく
する。人々が会議の中で慣習とは何か?と問う

て、かつての慣習を無効にし、こうした人々が
慣習を捨てた。慣習とは何か?と聞いてこれを
捨て、これを否定し、破壊する」(グラーチャの
語りより引用)。グラーチャは、この句を「嘘が
真実になり、真実が不真実になる」時代を予見
しているイッポイヤであるという。

イッポイヤの形式を借りた予言とされている
言葉は韻とリズムを持ち、歌のように口ずさま
れることでそれ自体が記憶されやすい。これら
の言葉はある時はワリオ・ウダテの言葉として、
またある時はモロ・ウチュマや別の人物の言葉
としてコンテキストを代えて登場し再解釈され
る。グラーチャのイッポイヤ解釈に見られるよ
うに、語り手たちはそれらの言葉に反慣習的で
ペシミスティックな現在や未来像を読み込む傾
向にある。

宮脇はボラナの近隣のエスニック・グループ
であるホール社会においても、こうしたボラナ
社会から「ラーガたちの予言」が流入し、伝承
されていることを記述している(宮脇 2006)。彼
が報告した「予言者たちの予言」は、ホールの
アレンジが加えられながらも、ボラナに流布し
ているものと同様に社会の崩壊と終末的な未来
を語ったペシミスティックなものである。

人々は語り手によって再解釈されたそれらの
言葉を「予言者たちの予言」として聞き取り語
り合う。そして、個々の予言者たちが語ったと
される詩、イッポイヤなどの多義的なテキスト
にさらに自らの省察を加え、解釈し、語り合い、
再構築しながら、そのつど「予言者たちの予言」
を生成させているのである。

2.3 予言者たちの喪失と復活

過去の出来事に関する語りにたびたび登場し
てきた予言者であるが、人々は現在予言者はい
なくなってしまったと語る。

予言者の誕生は、ワカの意図によるものだ。
予言者たちは様々な事物の言葉を聞くことが

できた。鳥の言葉やハイエナの言葉を聞くことができた。幸運 (*kaayoo*) が人々の間から消え、事物も何かを拒否するようになったと老人たちは言っていた。かつて老人たちはいった。予言者たちは老人になり、そして新たに生まれることなく消えていくだろう。予言者が消えると精霊憑依者 (*hayaana*) がやってくるだろう。精霊憑依者がやってきてそして全てが変わっていくだろう。現在モノを知っている人は全てイターン (*hixaana*: 北エチオピア起源の香) をたいて人々に何かを告げる。しかし、かつて予言者が人々に伝えていたことをする者はいなくなった。(デンゲ・ガヨより2007年8月収録)

この語りの中にみられるように、語り手たちは「かつてのような予言者」は存在せず、ハイヤーナと呼ばれる精霊憑依者たちが予言者にとって代わったという。ハイヤーナについては、ガダの父が63代目のマダ・ガルマの時 (c. 1952–1960) にその出現について複数の語り手によって語られている (Oba-Smidt in Printing)。精霊憑依は突如ボラナ社会に広まった現象であり、イターンという名の香を焚いて精霊 (*hayaana*) を呼び出し、精霊の媒介者は噛み煙草やコーヒー豆を使って占いをする。

口頭伝承の中で語られる予言者の中でアリ・ボッデの一族は、現在でもリネージが存続しており、予言者として名乗り予言活動を行っている。しかしながら、人々は彼らをもはや予言者とは認めていない。語り手たちは真の予言者がいなくなってしまった要因として、ボラナが慣習を守らなくなったからだと同様に語る。慣習の放棄として宗教的タブーの放棄やボラナのキリスト教徒化やイスラム教徒化や供犠儀礼の減少化が指摘され、こうした変化が予言者の喪失につながったのだとし、文化変容にともなう予言者の喪失という言説が複数の語り手によって指摘される。

現在予言者はいなくなってしまったが、語り手たちは未来においてまた予言者は復活するという。

予言者はのちに生まれるだろうといった。その時、人々は危機的状态に陥って死に人口が激減している。そして、かつての慣習が復活するといった。しかし、今は不適切な結婚がいたるところで行われている。人々は慣習を失っている。老人たちは力を失い、人々は羞恥心を失い、結婚前の女の子と結婚した女性が同じ家で子供を作る。そして、子供を作った女の子の両親が子供の父親を法的に決めるために法廷に行く。そうしたことをしているうちは、予言者は生まれまいだろうといった。(カリチャ・ゴダーナより2007年8月収録)

現在はボラナ自身がボラナの慣習を放棄しているので社会は崩壊の一途を辿っており、さらに未来においてボラナ社会に処方箋のない病気⁴⁾が蔓延し、多くの人間が死ぬといった最悪の事態に直面するが、その危機を乗り越えるならばやがてかつての慣習が再生する。ボラナ社会の再生のメルクマールが予言者の復活という形で現れるという。

こうした予言者にまつわる様々な言説の根底にあるのは、社会のあり方と予言者の相補的關係、真性の社会には真性の予言者が宿るとする考え方である。予言者は社会が本来あるべき正しい姿であるために、人々に予言という形で助言を行うことが社会的に期待されており、人々はその期待に基づいて予言を解釈してきた。ジョンソンはナイロート社会における予言者の活動は共同体の倫理を定義し維持することと関連し、予言者はこの観点から考察することができる⁵⁾と述べたが (Johnson 1994: 35)、ボラナ社会においても予言者は人間を超える力をもったいわば慣習の検閲者としての役割を社会において担ってきたといえる。

3. 口頭年代史に登場する予言者物語り

この章では、過去に生じた出来事に関する語りの中に登場する予言者たちが、それぞれの時代でどのように描写されているのかについて記述する。事例として、17世紀中葉に起こったとされる大移住、18世紀初頭に起こったとされるオロモ系牧畜民アルシとの紛争、19世紀中葉に起こったとされるガダの父と世代組との対立、および、世代組がほとんど全滅するという悲劇的な紛争、19世紀後半に起こったとされるボラナ社会全体を巻き込んだ大規模な内紛、19世紀末のエチオピア帝国からの侵略、これらの出来事に関する語りを取りあげる（Annex参照）。

3.1 事例1 26代目 アッバイ・バツボと予言者モロ・ウチュマ（c. 1656-1664）

かつてボラナは現在のエチオピア南東部バーレ地域に居住していたとされる（Mohammed 1990）。その地から現在のボラナの居住地に移住を行ったのが、26代目のガダの父であったアッバイ・バツボであるとされている。この時の出来事として語られるのは、アッバイ・バツボが行った大移住の物語りと彼のソマリ社会への出奔という物語りであり、その両方の語りの中に予言者は登場しアッバイ・バツボの相談役や助言者という役割を担っている。

アッバイ・バツボがガダの父であった時にいた予言者であり、ボラナに存在した最初の予言者と言われているモロ・ウチュマに、アッバイ・バツボはボラナの大移住に関して相談した。

アッバイが大移住をした時、モロ・ウチュマの予言を聞いてアッバイ・バツボはやってきた。モロ・ウチュマの予言だ。アッバイ・バツボがボラナの地に来るとき、彼はモロの予言とともにこの地にやってきた。モロはアッバイにどんなことを言ったのか。アッバイがこの地に移住すべきだというと、モロは移住すべきでないといった。その土地はすむことが

できない。その土地はいつも不安定ですむことができないといった。私はそれを防ぐとアッバイがいうと、どうやって防ぐのかとモロは尋ねた。雄ヤギや雄牛を供犠し、ダワやディバイユの儀礼、フィティコーの慣習によって防ぐといった。ダツバレ階梯の男に生まれた子を捨てることによって防ぐといった。そうすることによって防ぐといった。ダワやディバイユの儀礼、ウトウバ（大黒柱）によって防ぐ。モロはいった。そうしたことはお前を疲れさせうまくおこなわれなくなるだろう。ダワやディバイユの儀礼もいずれ行われなくなるだろうといった。アッバイは席を立ててしまった。アッバイはモロの助言を聞き入れずこの地にやってきた。モロは一緒にやってこなかった。（ジャータニ・モルより2009年10月収録）

モロは先見によって大移住の実行そのものを否定した。このことはワコ・ボンジャも同様の語りのなかでモロがアッバイに「お前たちが行く土地には問題がある。9代のガダの父が立つと問題がやってくるだろう。最初から何かしら問題が起こるだろう」（ワコ・ボンジャの語りより引用）と言って移住先で起こる困難を先見し、移住をしないように助言したと語る。そうした助言に対し、アッバイは敵がボラナのテリトリーに来ないようにする儀礼や雄ヤギや雄牛を供犠したり、供犠の一形態である子を捨てる慣習をおこなったりすることで困難を回避すると言ってモロの助言を聞き入れず移住を断行した。

モロが大移住に否定的な発言をするという語りがある一方で、モロの助言に従ってボラナが移住の際に先住民を駆逐して新天地で居住し始めたとする語りもある。その中でモロはいかにして先住民から土地を手に入れ移住するかに関する助言を行っている。

アッバイ・バツボは移住を決めると彼の兄弟のジャルソ・バツボを偵察隊として新天地に送

りこむ。新天地にはダーウェ (Daawwee)、タヤ (Xaya)、ターサ (Xaasa)、アブロージ (Abroojjii)、エル (Eluu)、バツボ (Baabboo)、キビヤ (Kibiya)、ワルダー (Wardaa)、コーレー (Koorree)、レンディーラ (Reendila) などの先住民⁵⁾ がいたので、アッバイはジャルソに新天地にいる先住民の中に狂人を装って偵察に行けと指示する。気違いを装ったジャルソは先住民の中に入り、無事偵察を終えて帰還し新天地へと向かう準備をする。人々がモロ・ウチュマに先住民を追い払う方法を尋ねに行くと以下のような助言をしたという。

「まず30人の部隊を出発させよ。部隊の指揮者を選んで30人の部隊を出発させよ。そして薪を重ねて塔を作りその塔に火をつける。その火の塔の中に入れる呪物を教えよう。そしてその土地に移住したら子を捨てろ」とモロは言った。これはフィティコー 100の慣習のことである。「移住してから5年間は子を捨て続け、6年目から育てよ。ダワやディバイユの儀礼 (敵の侵入を呪術的に防ぐ) をしてワイユ (*wayyu* : 儀礼の執行者) にビーズの首飾りをつけさせ、レーディメーサ・ヌーラ (*reeddimmeessa-nuuraa*) やガミュ (*gamiiyu*) というワイユの役職をつくれ。レーディメーサ・ヌーラは2人だ。ワイユには家畜を献上して彼の家畜囲いをいっぱいにせよ。イムやブーラン (ともにビーズの首飾り) をつけさせよ。もしそうしなければ、この土地によいことが起こらなくなるだろう。(サルバイエ・ジャルデッサより2009年10月収録)

ボラナの人々はよくソッドミ・ボーロ (*soddomi-booroo*) がこの地に最初にやってきた人々だという言い方をするが、ソッドミ・ボーロとはボーロの地からきた30人の人々という意味である。おそらくこの「30人の人々」とは30人しか移住しなかったという意味ではなく、30人編成の部隊を意味する言葉だったと考えられ

る。この30人編成の部隊はモロの指示によって新天地へ向かい、各地で呪物が組み込まれた木の塔を作って火をつけた。先住民たちはこの火の塔を見て戦わずして逃げたという。語り手アレーロは呪物の入った火の塔ではなく、モロが作った敵を愚か者や臆病者にすることができる呪物を携えて先住民と戦ったと語る。

いずれにせよ、モロが作った呪物によってボラナは土地や先住民たちが残していった深井戸を難なく手に入れた。そしてモロの助言に従って移住後は儀礼の執行者であるワイユの職をつくり、敵から土地を守るダワやディバイユの儀礼を行ったり、雄牛や雄ヤギを供犠したり、フィティコー 100とよばれる第5階梯であるドーリ階梯に達する前に生まれた子を捨てるということを始めたりして土地を呪術的に守るということを慣習化した。

移住後のガダの父であるアッバイ・バツボのソマリ社会への出奔という出来事もこの時代に起こったとされ、この出来事にもモロ・ウチュマは深く関わっている。

アッバイ・バツボは、自分の所有物や行為が常に⁶⁾と関連していることを奇妙に感じていた。例えば語り手アレーロの語りによると、アッバイは9つの家畜囲いを持ち、9の先住民族と戦って彼らを駆逐し、9人の息子をもっていたとし、語り手ワコの語りによると、アッバイは9つの家畜囲いを持ち、9人の妻を持ち、9人の子供を持っており、一夜で9人の妻の家から9頭の未經産牛から9頭の子牛が生まれた。こうした9と関連する出来事が連続的に起こるので、アッバイはこのことに何の意味があるのかと予言者であるモロ・ウチュマに尋ねた。モロ・ウチュマはこの現象は貴方にダーチ (*dhaaci*) がやってきているということの意味していると言った。ダーチとは父系リネージの成員間で繰り返される不幸な運命のことである。この時モロは、9と関連する事象が繰り返される現象はかつてアッバイ・バツボのリネージの中の誰かに同様に起こり、そし

てそのことに関連して死亡するなどの不幸が起こっており、それがアッバイ・バツボの身にも起ころうとしているのでその運命を祓うために家畜の供犠を行う必要があると助言した。

9が4回続き、妻が9人、家畜囲いが9つ、子供が9人、未經産牛が1晩のうちに9頭の子牛を生む。その9頭の子牛のうち1頭だけを残して8頭の子牛を供犠せよ。そして残った子牛も供犠せよ。すべての母牛がミルクを出さなくなるだろうが、貴方に降りかかる問題をふりはらうにはその方法しかない。(ワコ・ボンジャより2010年1月収録)

未經産牛から生まれた9頭の子牛のうち、まず8頭を供犠する。その後、9頭の母牛からミルクを飲んでよく育った最後の1頭の子牛も供犠する。予言者が指示したのは9と関連する現象を破壊することで9のダーチを祓うことであった。つまり、このまま9と関連する現象が起り続ければいずれ回帰する運命のためアッバイの身に不幸が降りかかるので、その前に9の現象を止めることで必然的に起こる不幸を未然に防ごうとしたのである。しかしながら、せっかかく生まれた未産牛の子牛を殺すということは、そこから数ヶ月間得られるはずのミルクを放棄することであり、妻たちは反対しアッバイは結局儀礼をすることができなかった。その結果、彼は気が狂ってボラナの土地を去った。

語り手のブルジはこのアッバイの出奔という出来事に関して「ビヨーレの道へ行き、知らない土地へ去った。(karaa Biyyoolee badi, biyya hin beennetti badi)」という詩を引用しながら語る。ビヨーレとは現在のケニア、ワジェーラの東方にある地域である。語り手のアーガヤグラチャーは、その後アッバイ・バツボはソマリの人々の中で暮らしたと語り、グラチャーはソマリの中でもサッファラ・ゴロー (saffara golo) といってラクダをつれて各地を転々とし髪を切らず大き

な頭をしたソマリ人の交易集団の中でアッバイ・バツボは暮していたと語る。そして、一度だけソマリの地からボラナの地に戻ってきて、彼の息子にボラナの慣習について伝授したという。

3.2 事例2 32代目アルシとの紛争 (c. 1704-1712)

32代目のガダの父ジャルソ・イッドの時、近隣のオロモ系牧畜民であるアルシとの大紛争があった。アルシはボラナのテリトリーの内部にまで攻め込み、戦死者、略奪された家畜や人など被害は甚大でボラナ社会はかつてないほどの窮地にたった。

この出来事はとても長い語りで、紛争の始まりから最終的にはボラナがアルシに打ち勝って平和を取り戻すまでを様々な挿話を差し挟みながら語られる。この語りの中でも予言者は重要な場面で何度も登場する。予言者は大紛争を事前に予言し人々に助言する。またアルシに一方的に負け続けている戦況を打開し彼らを倒す方策に関しても予言者が助言をしている。ボラナはそれらの助言に従って行動し、最終的にはアルシの部隊を全滅させる。

このアルシの紛争で活躍する予言者の物語を語った語り手は複数いる。語り手によって所々挿話が抜けたり詳細さに欠けたりするが、この物語りの骨組みはほとんど語り手間で変化はない。特に予言者の予言と打開策に関する助言は多くの語り手が必ず言及している。これから一番長く詳細な物語りを語ったジャルソ・タートのテキストを参照にしながらこの物語りを詳しくみていく。

アルシの部隊がやってくる前、「見る者」と「聞く者」という者たちがそれを事前にそれを察知した。遠くを見る力を持つ「見る者」は何か集団が動いているのが見えるのだが彼らは何を話しているのか? といって遠くの物音を聞く力を持つ「聞く者」に尋ねた。すると「聞く者」は、アルシの人々がアルシの予言者が彼らに言った

予言について話し合っているといった⁷⁾。

見る者がアルシの予言者は何を予言したのか?と聞く者に尋ねると、「アルシの人々が予言者にこれから戦闘に出かけるが何が起こるか?幸運はあるか?と聞くと、もしお前たちがソダの地やメガの土地に着いて、もしソダの地に流れる川にたどり着いたら無事に帰ることができるだろう。メガのワルマラの地のアカシアの木を見ることができたら幸運に恵まれるだろう。ボラナを殺してかえることができるだろう。アルシの予言者はこのようなことを話した」と聞く者は言った。(ジャルソ・タートより2009年12月収録)

このアルシの襲来の情報を聞いてボラナは予言者のところへ行った。予言者は人々に木を与えソダの地に流れる川を破壊する呪術を行い人々はその木を使って川をせき止め、また、ワルマラの地に立つアカシアの木を切り倒し燃やした⁸⁾。

予言どおり、アルシはボラナの地に侵入に成功し家畜を略奪した。しかし、アルシの予言者が予言した「ソダの地の川とワルマラの地のアカシアの木を見ること」ができなかった。このことに対しアルシは以下のように言ったとされる。

*afaan Sooddaa yaa-uu galaanatti didee, gubbaa
Waalmaal ejjuu dhaddachatti didee, affareessi Afaan
keessatti kutadhii.*

ソダの地に流れる川が消え、ワルマラの地にたつアカシアの木が消えた。ナイフを研げ! 屠殺した家畜をいそいで食べてしまおう。(ジャルソ・タートより2009年12月収録)

つまり、「予言者の予言どおりに事が起こらなかったのも、もしかしたら、我々は無事に帰ることができないかもしれない。だから、今ある奪った家畜を全部食べてしまおう」と詠ったの

である⁹⁾。

戦いも終盤になり、ボラナはアルシを駆逐するための打開策を予言者に相談に行く。予言者は人々に戦況を変えるための打開策を助言した。

マルベにいるジャルソ・ワーダというアワトウクランの男がいるが、その者のところへ行き彼を連れて戦場へいけ。その男が戦いでればアルシは皆死ぬだろう。彼自身も死ぬだろう。彼はボラナの地に帰ってくることはないだろう。略奪された牛も敵とともに帰らない。敵は全滅するだろう。その男は死ぬが略奪された家畜も人もボラナに戻ってくるだろう。そして敵は死ぬだろう。(ジャルソ・タートより2009年12月収録)

予言者の予言に従ってジャルソ・ワーダは死に、ボラナはアルシをダワ川の辺で全滅させることに成功した¹⁰⁾。

3.3 事例3 50代目ジャルデッサ・グヨと世代組の対立とその結末 (c. 1848-1856)

50代目のジャルデッサ・グヨ・ダッバサに関しては様々な語りがある。彼自身が「ジャルデッサ・グヨ・ダッバサは賢く、その母は、ガラーノ・ヌーラ (*Jaldeessi Guyyoo Dabbasaa qaroo Galaanoo Nuuraa*)」と詠われる英雄である。彼に関して彼の出自やガダの父になった経緯に関する語り、49代目のガダの父であるリーバン・ジロとの対立、晩年においてそれまでボラナが戦うことがなかったガリとの紛争の開始を予言するという語りなどがある。

そうしたジャルデッサに関する物語りの中で最も語り手によって取り上げられる語りは、彼と彼の世代組の成員との対立とアルシとの戦いの末、英雄を含めた世代組の成員がほとんど死んでしまうという出来事に関してである。この出来事について言及する語り手のほとんどが彼と彼の世代組との対立とアルシとの紛争での敗

北との間に因果関係があることを指摘しながら語りを進める。語り手たちは共通に、アルシとの戦いで敗北はジャルデッサと予言者の結託によって引き起こされたものであるとする。

ジャルデッサと彼の世代組の成員が対立し、ジャルデッサが儀礼をしようといえれば世代組の人々は戦いに行くといったように、ジャルデッサの指示に世代組の成員はことごとく反対する。このことに困り果てたジャルデッサは予言者に相談する。この時この事態を打開するために、語り手によってはジャルデッサが彼の世代組を滅ぼすための呪術を依頼したとも、予言者が呪術によって彼の世代組を滅ぼすように助言したとも語られるが、いずれにせよ、ジャルデッサは世代組との対立を打開するために世代組を滅ぼすための助言や呪術を予言者から受け取ったとされる。

予言者は世代組の人々がジャルデッサの指示と正反対のことをするという逆手にとって世代組が敵に負けるように仕向けた。つまり、予言者はジャルデッサに儀礼をしようとして世代組に提案するように助言し、世代組は彼に反対するので戦いに行くことになる。作戦会議において戦いへと向かう道や戦場、野営の場に関してジャルデッサにすべての安全な道や場を提案させ、世代組はそれらの提案に反対するので、自動的に危険な道や場で敵と戦うことになる。このようにして世代組は巧みに危険な方向へと誘導させられ、最終的には敵によって全滅させられてしまう¹¹⁾。

お前は戦いに出たらガンナーレの地から川を渡りサデーティの地へ行き、帰るときはアルガネの地から帰れ。ヤーの人々はあなたに反対するだろう。彼らがあなたに反対したらあなたは彼らの言うとおりにしろ。彼らはジャロの地から行こうというが、そうすれば敵がボラナを殺しその屍の上になつだろう。しかし、あなたはアルガネの地へ行こうと言え。

あなたがそういうと連中は必ずジャロの地から行こうという。その彼らの意向には逆らわずにあえてついていけ。そこで人々は死ぬだろう。それから、マーナンへ行き家畜を略奪して帰る時、あなたはサデーティの道から帰ろうと言え。そうすると、彼らは必ずチラッテの道から行こうという。あなたはそれには反対せず彼らについていけ。(ジャルソ・ワリオより2009年12月収録)

語り手たちは共通に、ジャルデッサはこの戦いの中で生き残り、「部隊は帰ってこないのに、どうやってゲールサを謳うのか？しかし、生き残った者もいる。どうしてゲールサは謳うことをやめることができようか？ (*duuli hin galle akkamiin geerani, ufi hin dhabne akkamiin lakkisani*)」と言ったという。ゲールサとは、戦場の帰りに詠われる、戦死者や戦況について描写した叙事的詩のことである。

この戦いで生き残った人々が詠ったとされるゲールサで、戦いの時、予言者の助言によって誘導され、英雄たちが続々と死んでいった危険な道や戦場について言及した叙事的詩があり、複数の語り手たちによってほぼ同一の詩が発話されている。

*gala abbaa dubraa haatee Nuuraa Jaldeessaa bade,
Jaldeessi Maannaan labee, Jiloo Kuloo bade,
Machaa-aan Amburroo Hangee karraatti bade,
Machiin Jiloo Finiinaa bu-aa Cirrattee bade, bu-aan
cirraacha taate janni wa hin dheenne bade.*

頭を結婚前の娘のように剃ったラーバが攻撃し、ヌーラ・ジャルデッサは死んだ。ジャルデッサはマーナンの地を巡り、ジロ・クロは死んだ。マチャ・アンブロはアングの道で死んだ。マチーンの年齢組のジロ・フィニーナは敵が家畜を取り戻しに来て、チラッテの地で死んだ。敵が家畜を奪いに大軍で押し寄せ、怖い者知らずの強者たちが皆死んだ(グラーチャ・ゴ

ダーナより2009年7月収録)

gala abbaa dubraa haate, Nuuraa Jaldeessaa bade, Jaldeessi Maanna labe Jiloo Kuloo bade, machiin Kuloo Fimiinaa bu-a Cirratte bade, itti gobbite Gobbaa Cophii bade, bu-aan achee dhawatte Achee Tuuchee bade.

頭を結婚前の娘のように剃ったラーバが攻撃し、ヌーラ・ジャルデッサは死んだ。ジャルデッサはマーナンの地を巡り、ジロ・クロは死んだ。マチーンの年齢組のクロ・フィニーナはチラツテの地で死んだ。敵がたくさんやってきてゴツバ・チョピは死に、敵であたりが白一色になりアチェ・トゥーチェが死んだ。(ジャルソ・ワリオより2009年12月収録)

yabbii dabalaan fuutee Dheeraan Orree bade, Galalcha duubaan haate Bontooree Soree bade, gala abbaa dubraa haate Nuuraa Jaldeessaa bade, Jaldeessi Maanaan labe Jiloo Kuloo bade, gaafa bu-aa cirratte bu-aan cirracha taate janni wa hin dheenne badeeni.

敵がいなくときを見計らって子牛を奪った時、デーラン・オレが死んだ。敵が突然サボ半族を襲い、ボントーレ・ソレが死に、頭を結婚前の娘のように剃ったラーバが攻撃し、ヌーラ・ジャルデッサが死んだ。ジャルデッサはマーナンの地を巡り、ジロ・クロが死んだ。敵がチラツテの地に家畜を奪いに大軍で押し寄せ、怖い者知らずの強者たちが皆死んだ。(ワコ・ボンジャより2010年1月収録)

dabalaan yabbii fuute Dheeraan Orree bade, Jaldeessi Maanaan dhaqe Jiloo Kuloo bade, itti gobbite Wayaamaa Gobbaa Cophii bade, loli mataa wal tume Matoo Tuntichi bade, loli wal mamallise Malhuu Mallaa badeen.

敵がいなくときを見計らって子牛を奪った時、デーラン・オレが死んだ。ジャルデッサ・

グヨがマーナンの地を巡って、ジロ・クロが死んだ。敵がたくさんやってきてワヤマの地でゴツバ・チョピが死んだ。敵の頭をかち割ったマト・トゥミチが死んだ。戦いの叫び声がこだまし続け、マル・マラで人々は死んだ。(ドゥーバ・ディーマより2009年12月収録)

この詩は戦死者と戦況を描写しているものであるが、言及されている戦地の名と予言者がジャルデッサにした助言という挿話とが連動することによって内紛が要因となって紛争を引き起こし、結果ボラナが敵に大敗北をするという「歴史」が生成されている。

3.4 事例4 53代目ティロ・ワラーバ (c. 1872-1880)

人々は53代目のディーダ・ビタータの代で起こった内紛をティロ・ワラーバと呼ぶ。ワラーバとは戦いの始まりとなった場で、ティロという名の本を尖らせて槍のかわりにして戦ったことからこう呼ばれるようになった。この戦いの発端は諸説¹²⁾あるが、最終的にはボラナの政治に発言権をもつカッル同士が対立し、カライユクランのカッルを擁するサボ半族とオデイトゥクランのカッルを擁するゴナ半族に分かれて戦うというボラナ社会を二分する大規模な内紛へと発展した。

この内紛の中においても予言者が登場し、予言者はこの出来事の中でカライユクランがオデイトゥクランの一派に勝つための呪術を教え、カライユクランを勝利に導くという役割を担っている。

例えば、語り手サルバイエは予言者がカライユクランの人々に、オデイトゥクランの人々が麓で夜営している山の上で雄ヤギを供犠し、その供犠した雄ヤギの上に呪物をふりかけて火おこし棒をその上に落とせと言ったとする。また別の語りでは予言者がティロという名の本に呪術を施し、カライユクランの人々はそれを尖ら

せて槍として戦いに使ったと語られる。

「もし投げ放ったティロの木が敵に刺さったままにして去れば、サボ半族はいなくなりカライユクランはいなくなってしまうから、必ず敵からティロを引き抜け。そして血しぶきを浴びればサボ半族はゴナ半族に勝つだろう。」と予言者は人々に助言し、だからサボ半族は必ずティロを奪って逃げた。(ワコ・ボンジャより2010年1月収録)

そうして予言者はカライユクランが勝つように助力する一方で、カライユクランの人々がさらに強力な呪術を要求した時、警告を発している。

予言者は「やめたほうがよい。オデイトウクランを倒す方法をお前たちに教えれば、ボラナ自体が消えてなくなるだろう。」と言ったが、カライユクランの人々は何か方法があるのだったらとにかく教えろとあってあきらめなかった。予言者は「もし、お前たちが、カテーブ (*kateebuu*) を川に投げ込み牛の小便が川に流れこめば、歯茎の赤い人々 (*irga-diimeessi*) が押し寄せてくる。土の中から敵がやってくるだろう。マーニャ・ムルコーやエレレーンが押し寄せてくるだろう。生活はどんどん悪くなっていく。だからやめたほうがよい」と予言者は言った。(グラーチャ・ゴダーナより2007年9月収録)

語りの中に出てくるカテーブとは100頭の子牛を川に投げ込むことだという語り手もいるが、毒蛇を運ぶ雄牛を川に投げ込むことだという語り手もいる。毒蛇をカライユクランの人々は袋に入れて育てるのだが、移動する時は牛群から離れさせた雄牛の背に乗せて運ぶ。その雄牛は鞭で打ってはならない。水を与えてとてもよく世話をする。その雄牛を川に投げ込む事がカテーブという強力な呪術であるという。予言者は相

談者たちに対しこの呪術を使うことをやめるようにいい、そうしなければ後に見知らぬ敵がやってきてボラナの慣習を崩壊させると警告する。歯茎の赤い人々がやってくると語られているが、牧畜民は常にミルクを飲んでいるので歯茎が白いと考えられ、その反対として農耕民が想起される。さらに「土の中からやってくる敵」とは、土を固めて家をつくる慣習をもつ北エチオピアで王国を築いているアムハラ人を含意させている。

そしてそうした敵とともに、マーニャ・ムルコーやエレレーンがやってくると予言されているが、マーニャ・ムルコーやエレレーンとは、予言者特有の言葉で父親が分からない子供が増えるという現象をさす。父親が分からないということはリネージを通して伝承されてきた知識も所属すべきクランや世代組も分からないということであり、父系リネージによってつながった村落共同体やクランや世代組を基盤として連帯するボラナ社会、その濃密な人間関係の喪失と匿名的で希薄な都市的人間関係の形成を意味する。つまり、この内紛にまつわる語りはこのような予言者の予言という挿話によってその後の帝国からの侵略とそれにとまなう大規模な社会変容という出来事へと接続されているのである。

結局、この戦いはオデイトウクランが屈辱的な敗北をし、すべてのガダの役職者はカライユクランの意向によってコニトウクランを除いて一新されたという。この出来事以降カライユクランがボラナ内部での権力を強めることになる。その後1885年において、ボラナの地に訪れたアメリカ人の探検家のドナルドソン・スミスがカライユクランのカッルに統率された集団に襲撃されたという記録を残している (Smith 1896)。このカライユクランの政治上の優位という体制はエチオピア帝国からの侵略時も続いており、メネリク2世はカライユクランのカッルに称号を与えたり、カライユクランの人々に役職を与えたり、彼らをエチオピア帝国とボラナ社会との

仲介者とし、ボラナを統治するためにその権力を利用した。

3.5 事例5 55代目エチオピア帝国のボラナ征服 (c. 1888-1896)

19世紀後半、現在のアムハラ人及ティグライ人を指すハベシャ (habesha) と呼ばれる人々を中心に、エチオピア北部から中央部にかけての高地地帯に成立していたエチオピア帝国は巨大な勢力を持っていた。帝国内部では皇帝の下に、ティグライ、ベゲムダール、ゴッジャム、ウォックロ、シャワの地域にそれぞれ王が存在し王国を形成していた。そうした中でシャワ王国のメネリク2世はイタリア、フランスなどのヨーロッパ諸国やアラブ人たちと外交と交易を行い、象牙や金や皮製品によって大量の武器を手に入れた。彼はその圧倒的な火力をもって南部諸民族への侵略を始める。その目的は奴隷や封建制を維持するための土地の獲得などの富の収奪にあった。1860年代、現在のアディス・アベバ付近に居住していたオロモの分派集団であるトゥーラマの人々への侵略から始まり、グラゲ、ハラール、オモ、ベニシャングル、ワラガなどの諸地域の侵略を行った。1887年に皇帝ヨハネス4世の後をついて自らが皇帝になった後は、エチオピア帝国の名で南部諸民族の征服と統治を続け、ボラナは1897年に征服された。彼の大遠征の結果が現在のエチオピアの版図となり、近代国家への基礎を築くことになった。

5人の語り手たちが55代目のリーバン・ジャルデッサの時に起ったこのエチオピア帝国のボラナ征服という出来事は、すでに予言者たちのよって予見されていたことであると語った。彼らはそれぞれエチオピア帝国の征服を予言した3人の予言者たちが登場する語りを語っている。

a) アレーロ・ボーサロの予言

アレーロ・ボーサロは出生年はわからないが1904年から1912年の間に死んだとされ、その墓

がボラナ地区中西部のディーダ・バーリ地域にある。彼の息子は子孫を残すことなく死亡し彼のリネージは断絶している。彼は詩の形で予言を残しているが、この詩に関してはマルコ・バッシとボク・タッチェが報告を行っている (Bassi and Boku 2005)。

語り手サルバイエは、アレーロ・ボーサロは帝国の到来をこのように予見したと語る。

菌莖の赤い奴らがやってくるだろう。オリックスの角がやってくる。角のないサイがやってくる。オリックスの角の中から黒い虫が飛び出して、それが人を殺す。この敵を呪術によって追い払おう (サルバイエ・ジャルデッサより 2009年10月収録)

前述したように「菌莖の赤い奴ら」とは農耕民を指し、「オリックスの角」は銃、「角のないサイ」とは車、「オリックスの角の中から飛び出してくる黒い虫」とは、銃弾を意味しているという。これらの描写は、アムハラ人を想起させるものである。彼によるとアレーロ・ボーサロはこうした未知の敵を呪術で追い払うことを人々に助言した。その呪術とは未經産のロバを供犠し前足の一本を切り取って目の上に置き、その腸を引き出してクルクルの道に埋めること。もう1つは子犬の目を潰して、クルクルの道にその子犬を生き埋めにするということであった。

語り手デンゲもアレーロ・ボーサロが未知の敵の到来を予知するという同様の語りの中で人々に2つの助言をしたとする。1つはこの困難を乗り越えるためにクルクルの道でメスのロバを供犠すること、もう1つは敵の予言者もまたメスのロバを供犠することを指示するので彼らより先に儀礼を行わなければボラナは彼ら征服されてしまうという助言である。デンゲの語りの中では実際に人々が征服前夜に敵がロバを供犠するところを目撃し、彼の予言が正しかったことが明らかになる。

アレーロ・ボーサロはこのような助言をしたが、ロバや犬を供犠するということは人々にとって気違いじみた行為であり、彼の予言は信じられず実行されなかった。そしてアムハラ人はやってきた。アレーロ・ボーサロは人々に「私はちゃんと予言した。それを拒否したから消えるだけだ。我々は土地を失うだろう。」といったという。

b) ワリオ・ウダテの予言

エチオピア帝国からの侵略やチェチエバエの来襲が起こる以前にワリオ・ウダテは55代目の大危機の時代を予言したとする語りがある。54代目のグヨ・ボル・ウングレの時 (c. 1880-1888)、ボラナはエルデロの地で会議を開き、そこに予言者たちが招集された。この時語り手ドゥーバは8人の予言者たち、語り手サルバイエは12人の予言者たち、語り手ジャータニは17人の予言者たちが招集されたとする。

ドゥーバによると8人の予言者たちのうち、ワリオ・ウダテを除いて全員が8頭の灰色の牛とヤギを現在のソツダの付近のディカータ (Dhiqaata) で供犠し、コラーユ (Koraayyu)、コンボーラ (Kombola)、トゥル・ナマ・ドゥリ (Tullu-nama-duri)、カーラ・キッキチャ (kaarra-qiiqicha)、デーカ・ボーファ・ガーファ (Dheekkaa-bofa-gaafaa) の方向¹³⁾ へ移住すれば平和がやってくると言った。しかし、ワリオ・ウダテだけが違う予言をした。

7人の予言者たちは未来において平和を見たが、4年後家畜は全て死に絶え人々は馬やロバをたべるようになるだろう。7年後黒い筒 (*buudaa-gurracha*: 銃を指す) がやってきてボラナの地を征服するだろうとワリオ・ウダテは言った。(ドゥーバ・カールより2007年8月収録)

ジャータニの語りの中でも、他のラーガが平和を予言したのに対しワリオ・ウダテだけが危機の予言をしており、ワリオ・ウダテの予言は

人々に信じられなかった。ドゥーバの語りではのちに実際にワリオ・ウダテの予言が実現したのを見た後、アブタノという人が彼の元におもむいてさらにボラナの未来について尋ねるといふ挿話が語られる¹⁴⁾。

c) ボル・ジロ・ワレの予言

ボル・ジロ・ワレもまた征服前夜に未知の敵が未知の武器を持ってボラナを侵略しにくることをヤーとよばれるガダやクランの役職者たちの村で予言するという語りがある。

語り手ドゥーバによると、ボル・ジロ・ワレは自らの予見をヤーの村の人々に訴えたが、我々には英雄がたくさんいる彼らが負けるわけがないと聞いて全く聞き入れてもらえなかった。しかし、彼の予見を信じた1人の老人とその親族だけが彼のかけた呪術によって助かったが、ヤーの村は帝国の襲撃にあい全滅したとされる。

これと同様な語りをこの予言者の孫にあたる語り手ブルジも語っている。ブルジの物語りではボル・ジロ・ワレが人々に帝国の襲来を予言したのは53代目のディーダ・ビタータの時であるとされる。前者の物語と同じようにボル・ジロ・ワレは強敵の襲来を予言したが、英雄が我々を守るので敵は我々を倒すことはできないと聞いて聞き入れられなかった。しかし、実際に侵略が起こった後で、彼の予言を信じなかった一人でありガダの父であったディーダ・ビタータはのちに彼を呼んで謝罪しながら、ボラナの未来に関して尋ねるといふ挿話が語られる。

4. 予言・呪術成就史観

以上みてきたように過去の出来事に関する語りの中で予言者たちは、出来事の生起を事前に予知し問題に対処する方法を人々に教えたり、呪術を人々に施したりしてきた。出来事はあたかも予言者たちの予言や呪術のとおり生起したかのように語られる。筆者はこうした因果関係論を「予言・呪術成就史観」と名づけた。この予言・呪術

成就史観は何故出来事への語りの中に繰り返し現れるのだろうか。この史観が「ボラナの歴史」の中で果たす役割とはなんだろうか。

前節であげた5つの事例からいえることは、第1にボラナ社会を大きく変えようとする出来事やカタストロフィックな出来事において予言者が登場しているということである。第2に語りの中で予言者はカタストロフィーを助言や呪術によって未然に防いだり引き起こしたりしながら、出来事の動因者となっている点である。事例1で取り上げたモロ・ウチュマの呪術は、先住民との紛争を回避したし、事例2ではボラナがアルシにテリトリー内部にまで入りこまれて攻撃を受けるといった事態に陥るが、予言者の助言はボラナ社会の窮地を救う。事例3では予言者の助言や呪術によって世代組がほとんど全滅するという大惨事が引き起こされるが内紛問題は解決される。事例4では予言者の呪術は内紛を終結させるが、未来におけるエチオピア帝国の侵略という出来事を誘引することになる。

第3に、予言者は因果関係論を提示しながら、出来事の生起に関する説明者となる傾向にある。事例1において予言者は、アッバイ・バツボは「9のダーチ」を持っているので供犠を行わなければ何か悪いことが起こると助言したが、人々が予言者の助言を聞き入れなかったことによってアッバイは気が狂ってしまった。このように不幸な出来事は予言者の予言を聞き入れなかったことによって起こった出来事として扱われる傾向にある。

エチオピア帝国からの侵略がそのよい例である。事例4の語りにおいて、カライユ克蘭の人々が予言者の助言を聞かず内紛に勝つために強力な呪術を行使してしまったという挿話は、その後のエチオピア帝国からの侵略の要因として語られる。事例5において3人の予言者の物語りに共通してみられるのは、予言者たちの予言を人々が信じなかったことによって侵略が引き起こされた、あるいは被害が甚大なものとなったとす

る見方である。アレーロ・ボーサロがメネリク2世の遠征軍の到来を予言する中で、その不吉な未来を打開するための対処として犬やメスのロバを供犠するというボラナの慣習儀礼とはかけ離れた助言を行った。アレーロ・ボーサロは自分の予言を拒否すれば、ボラナは消えるだけだと事の成り行きを説明する。犬やロバの供犠という特異な事象を使って示されている事はたとえ荒唐無稽なことでも予言者の予言を信じて犬やロバを供犠していれば、ボラナは征服から免れることができたのだとする因果関係論である。ボル・ジロ・ワレやワリオ・ウダテの物語りもまた、人々が予言を聞き入れていれば、ボラナは征服されることはなかったのだというよく似た筋書きと結末を提示している。予言者たちが説明する因果律によって一方的な外部からの征服の歴史がボラナの過ちの「歴史」へとすり代わることで、ボラナにとって無意味な出来事から意味が生み出されている。

人々は予言者の予言どおりに行動することによって社会変動を克服することができたとする物語りを語る。一方で、予言どおりに行動しなかったので社会変動を克服することが出来なかったという物語りを語る。出来事の帰結は違っているが両者とも予言者の予言が成就したという筋書きは変わらない。人々が予言者の予言を聞き入れようが聞き入れまいが予言は成就するという点に、「予言・呪術成就史観」がボラナの歴史記憶を支える因果論として頻繁に採用される所以がある。人々が予言を聞き入れ危機が回避された場合は「成功の歴史」、人々が予言を聞き入れず危機が起こった場合は「失敗の歴史」として処理され出来事が社会に引き起こした不条理や恐慌状態は昇華される。

語り手たちは「歴史」を構築する上で、出来事が起こった後だけではなく予言という挿話を使って出来事が起こる前にも解釈を加えようとする。もちろんこうした試みは、なにもボラナの人々に限らず歴史学者がある事件がいかに生

起したのかをその事件の前の出来事にさかのぼって原因を探しだそうとする試みの中にもみられる。しかしながら、例えば、天災やエスニック・グループからの攻撃、帝国による征服のように、ボラナの世界の外部から突如として現れる出来事、彼らの社会の中でその脈略をさがしても全くでてくるはずのない出来事が生起することがある。語り手たちはそうした未曾有の出来事を「予言者の予言や呪術の成就」という挿話を差し挟むことによって解釈し、彼らにとって必然的な「歴史」として構築しようとする。「予言・呪術成就史観」は、カタストロフィーを理念的に飼いならす技法であり、社会の中で起こってきた生存を脅かすカタストロフィーを予言や呪術による克服／非克服として解釈することで超克しようとするボラナの人々の歴史実践のひとつなのである。

5. おわりに

本稿で取り上げた予言者言説はボラナ社会に限られた現象ではない。ヌエルの予言者言説の中にもボラナの予言者言説との類似性がみられるし、近隣のエスニック・グループであるホール社会ではボラナの予言者言説が流通し、出来事の生起を解釈する様式になっているという報告もなされている（宮脇 2006）。

浜本は、人々の語りの中で個別性を超えていく部分がある集団固有のコスモロジーとして捉えるのではなく、ある種のネットワーク的な空間に帰属するものとして想像しなおす。彼は個人にも集団にも還元することができない知識体系をコミュニケーションの網の目の中で流通しているものだとし、この網の目を「言説空間」と呼んでいる（浜本 2001: 43）。ボラナやその他の社会にみられる予言者に関する言説は、まさに「言説空間」の中で反復、再解釈、改変、創造され、集団の成員間において高度の一致性と多様性をもちながら流通してきた。なぜ、予言者言説が「言説空間」で流通しやすいのか。そ

れは世界にはびこる偶然性や不確実性、不条理性を超克する技法を人々に与えているからだ。本稿で明らかになったことは、ボラナの言説空間の中で予言者たちや彼らの予言や呪術は特に出来事が引き起こした社会変動を超克する技法として運用されてきたということである。このことは、「言説空間」は共時的な側面だけではなく通時的な側面も持つものとして再考されるべきであり、今日的に構築される「言説空間」と口頭伝承が生み出してきた「言説空間」との関係さをさらに考察していく必要性を示している。

Annex ガダの父の系譜および口頭年代史の中で登場する予言者物語り

- | | |
|---------------------------------------|--------------------------|
| 1, c. 1456–1464 | Gadayoo Galgaloo |
| 2, c. 1464–1472 | Yaayyaa Fulleellee |
| 3, c. 1472–1480 | Jaarsoo Babboo Gannoo |
| 4, c. 1480–1488 | Daawwaa Borbor Daawwee |
| 5, c. 1488–1496 | Diida Nama Duri |
| 6, c. 1496–1504 | Areeroo Boruu Bakkalchaa |
| 7, c. 1504–1512 | Tittilee Dullachaa |
| 8, c. 1512–1520 | Lukkuu Jaarsoo Babboo |
| 9, c. 1520–1528 | Daadoo Hideo Daadaa |
| 10, c. 1528–1536 | Kuraa Dhaalaa |
| 11, c. 1536–1544 | Dagalee Yaayyaa |
| 12, c. 1544–1552 | Osoosoo Tiittilee |
| 紛争に関して助言する予言者の挿話（18人中1名） | |
| 13, c. 1552–1560 | Booroo Lukkuu Jaarsoo |
| 14, c. 1560–1568 | Abbayi Horoo |
| 15, c. 1568–1576 | Biduu Dhoqqee Rasoo, |
| 豪雨の要因を解説する予言者の挿話（18人中1名） | |
| 16, c. 1576–1584 | Haroo Daddachaa, |
| 17, c. 1584–1592 | Yaayyaa Hoolee Bonayyaa, |
| 18, c. 1592–1600 | Dooyyoo Booroo Lukkuu |
| 19, c. 1600–1608 | Bachoo Nadhoo |
| 20, c. 1608–1616 | Urgumeessa Higguu |
| 21, c. 1616–1624 | Baaboo Horoo Dullachaa |
| 22, c. 1624–1632 | Baaboo Sibuu Beerree |
| 23, c. 1632–1640 | Hindhalee Dooyyoo Booroo |
| 24, c. 1640–1648 | Acuu Abbiyyuu |
| 25, c. 1648–1656 | Abbuu Lakkuu Mormaa |
| 26, c. 1656–1664 | Abbayi Baabboo Horoo |
| 大移住やガダの父に関する予言、助言、呪術を行う予言者の挿話（18名中6名） | |
| 27, c. 1664–1672 | Haallee Kuraa Yaayyaa |
| 紛争に関して予言する予言者の挿話（18名中1名） | |

- 28, c. 1672–1680 Waayyuu Uruu Malleelle 人中1名)
- 29, c. 1680–1688 Morowwa Abbayi 56, c. 1896–1904 Adii Dooyyoo Jiloo
- 30, c. 1688–1696 Gobbaa Allaa Nuuraa 57, c. 1904–1912 Boruu Galma Dooyyoo
ガダの父に助言をする予言者の挿話 (18人中1名)
- 31, c. 1696–1704 Daawwee Goobboo 58, c. 1912–1920 Liiban Kusee
- 32, c. 1704–1712 Jaarsoo Hiddoo Yaayyaa 59, c. 1920–1928 Areeroo Geedoo Liiban
紛争に関して予言や助言を行う予言者の挿話 (18名中6名)
- 33, c. 1712–1720 Walee Waaccuu 60, c. 1928–1936 Bulee Dabbasaa Bulee
ガダの父の出奔に関して助言をする予言者の挿話 (18名中1名)
- 34, c. 1720–1728 Sora Dhattachaa 61, c. 1936–1944 Aagaa Adii Dooyyoo
- 35, c. 1728–1736 Dhaddacha Rooblee 62, c. 1944–1952 Guyyoo Boruu Galmaa
- 36, c. 1736–1744 Halakee Dooyyoo 63, c. 1952–1960 Madha Galma Toree
- 37, c. 1744–1752 Guyyoo Geedoo 64, c. 1960–1968 Jaldeessa Liiban
- 38, c. 1752–1760 Madha Boruu 65, c. 1968–1976 Gobbaa Bulee
- 39, c. 1760–1768 Sora Diidaa Qarsaa 66, c. 1976–1984 Jiloo Aagaa
複数の紛争において予言、呪術を行う予言者の挿話 (18人中2名)
- 40, c. 1768–1776 Sora Dhattachaa
- 41, c. 1776–1784 Liiban Waataa
- 42, c. 1784–1792 Waayyuu Raallee 無敵の部隊の誕生を予言した予言者の挿話 (18人中1名)
- 43, c. 1792–1800 Boruu Madhaa
- 44, c. 1800–1808 Ungulee Halakee 大雨を予言する予言者の挿話 (18人中1名)
- 45, c. 1808–1816 Saaqqoo Dhaddachaa
- 46, c. 1816–1824 Jiloo Nyeencoo
- 47, c. 1824–1832 Sokoree Annaa 67, c. 1984–1992 Boruu Guyyoo Boruu
グジとの紛争に関して助言する予言者の挿話 (18人中1名)
- 48, c. 1832–1840 Madha Boruu Madhaa
- 49, c. 1840–1848 Liiban Jiloo
- 50, c. 1848–1856 Jaldeessa Guyyoo 68, c. 1992–2000 Boruu Madha Galmaa
アルシとの紛争に関して予言する予言者の挿話 (18人中8人)
- 51, c. 1856–1864 Dooyyoo Jiloo
- 52, c. 1864–1872 Haroo Adii コレラを予言する予言者の挿話 (18人中1名)
- 53, c. 1872–1880 Diida Bittaataa 69, c. 2000–2008 Liiban Jaldeessa
内紛の中で呪術を行う予言者の挿話 (18名中6名)、エチオピア帝国の侵略を予言する予言者の挿話 (18名中2名)
- 54, c. 1880–1888 Guyyoo Boruu Ungulee 70, c. 2008–2016 Guyyoo Gobbaa Bulee
エチオピア帝国からの侵略とツェツェバエの来襲を予言する予言者の挿話 (18人中3人)、大雨の予言をする予言者の挿話 (18人中1名)
- 55, c. 1888–1896 Liiban Jaldeessa 70, c. 2008–2016 Guyyoo Gobbaa Bulee
エチオピア帝国からの侵略を予言する予言者の挿話 (18人中3名)、偽予言者に関する挿話 (18人中1名)

注

- 1) エチオピア政府はエスニシティ別に人口統計を行っているわけではないので、この中にはこの自治区に移住している他のエスニック・グループに出自をもつ人々も含まれる。この統計によると町場の人口が35,694人、その外に広がる村落部の人口が346,154人と出ている。村落部はほぼボラナで占められているので村落部の数字で大体のボラナ人口の目安がつく。
- 2) ボラナには全部で17のクランが存在しているが、その中でコニトウクランとアフトウクランはそれぞれのクラン内部でガダの父を選出し、残りの15のクラン内部からガダの父を1人選出する。15クラン全体を代表するガダの父がアルポーラのガダの父とよばれる。
- 3) カッル (*qaalluu*) とはその存在自体が崇拜の対象とされている人物であり、その地位は特定のリネージの成員によって世襲される。また、カッルはガダやクランの役職者の最終決定に権限をもち、カッルの承諾を得なければ役職をえることができないとされてきた。
- 4) 現在 語り手たちは予言されたこの処方箋のない病をHIV/AIDSと解釈している。HIV/AIDSは不特定多数の性的関係を社会的に容認する慣習を通して現在急速にボラナ社会に広まっている。
- 5) これらの先住民のうちでアブロージ、エル、バツボはカライユクランの中に吸収され、ダーウェは様々なクランにまたがって吸収され同化した。その他の先住民の中で、ワルダーはケニアに住むオルマ、コーレーはサンプル、レンディーラはレンディーレ、キピヤはマサイ語を話すキピ

ヤと呼ばれる牧畜民である。タヤ、ターサについては現在のどのエスニック・グループにあたるのか同定できなかった。

- 6) タダセ・ベリッソはオロモ集団の一分派であるグジの人々の間に伝わるイッポイヤを分析する中で、9という数字は人々にとって特別な意味をもつものであり、危機、不幸あるいは病気、家族が親族の死、あるいは死霊をグジの人々の間で想起させるものであると報告している。とくに9人目の子供は重要な存在であるとともに問題をはらんだものとして人々に考えられており、9人目の子供を妊娠した場合、サリ・ファッラ (*Sallii falla*:9を祓う) 儀礼を行う。その儀礼を行わなければ母親あるいはその子供に深刻な病あるいは死がおとずれるか、無事に出産がすんだとしてもその子供はその家族や社会にとって役に立たない存在になると信じられている (Taddesse Berisso 1998)。アスマロンもこのアッバイの身に降りかかった9の連鎖という現象に関する口頭伝承について言及している (Asmarom 1973: 198)。
- 7) この見る者と聞く者の挿話は語り手グラーチャの語りの中にも登場する。グラーチャの場合は「見る者」と「聞く者」に加えて「嗅ぐ者」という人も対話に参加し、この3人は予言者であるとする。
- 8) この挿話に関し語り手のアーガヤクヌは、アルシの予言者とボラナの予言者がそれぞれ予言をし、アルシの予言者がアルシの人々に「ワルマルの地の木とソダの地の川のところへ行け」と指示し、ボラナの予言者は「アルシがワルマラの地の木やソダの地の川を見なければ戦いに勝つことができるので、この木と川をアルシに見られないように事前に消せ」といったのでボラナは指示に従ったと語る。
- 9) このアルシが言ったとされるこの詩的な台詞は複数の語り手が同様に発話している。語り手グラーチャの場合、アルシの指揮官が奪った家畜を供犠した際に言った祈りの文句の中でこの詩的台詞を発話する。語り手アーガもまた、アルシの指揮官がボラナによって殺されたことに関する別の指揮官の台詞の中に引用して語っている。
- 10) この人身御供にされるジャルソ・ワーダという男に関する予言についても他の語り手も言及しており、アワトゥクランのワランササブクランの人でテルテルの地に住んでいることになっていたり、片目の男だと描写されていたりする。ジャルソはこの時彼のサブクランから独占的にガダの役職者を選出するという条件に人身御供になることを承諾した。この約束は現在でも守られていると語られる。

- 11) 語り手によってはこうした助言のほかに、予言者の呪物によってボラナとアルシのテリトリーの境界にあるダワ川が増水してボラナがアルシのテリトリーに閉じ込められたり、ジャルデッサが生き残るように図られたりしたという挿話が付け加わる。
- 12) この内紛の原因であるがガダの役職者であるアドゥラの選出をめぐる政治的対立によるものであるという点は語り手の間で一致しているのだが、その対立の図式が語り手によって2通りに分かれる。1つはカラユクランのカッルとオデイトクランのカッルとの対立という説、もう1つはカラユクランのカッルとマターリクランのゴダーナ・モイエという英雄との間で対立がおこり、のちにオデイトクランのカッルがこの対立に巻き込まれたとする説がある。
- 13) これらの地名は口頭伝承によく登場し、コラユ、コンボーラ、カーラ・キッキチャは現在のグジの居住地域、トゥル・ナマ・ドゥリはアルシの居住地域にあるとされ、デーカ・ボーファ・ガーファという地については同定できなかった。
- 14) ドゥーバの語りの中でワリオ・ウダテは1888年から1889年にかけておこった牛疫について予言しているとされるが、ヌエルの予言者について記述したジョンソンは、同時期にンゲンデングという名の予言者がエチオピアからヌエル地方に侵入した牛疫や天然痘という2つの天災を予言したことでその名声を高めたと述べている。ンゲンデングは疫病が蔓延するまえにブッシュにおいて12頭の牛を供犠し放置して腐らせ、さらに彼の村で牛を供犠しそれらを食べたといわれている (Johnson 1994)。

参考文献

- Anderson, David M. and Douglas H. Johnson
1995 *Revealing Prophets: Prophecy in Eastern African History*. London: Ohio University Press.
- Asmarom Legesse
1973 *Gada: Three Approaches to the Study of African Society*. New York: Free Press.
- Bassi, Marco
2005 *Decisions in the Shade: Political and Juridical Processes among the Oromo-Borana*, translated by Cynthia Salvadori. Trenton and Asmara: Red Sea Press.
- Bassi, Marco and Boku Tache
2005 "The Oromo eschatology: The prophecy of Areeroo Boosaroo narrated by Borbor

- Bulee and Guyyoo Danbii.” *Journal of Oromo Studies* 13(1/2): 174–222.
- Baxter, P. T. W., Jan Hultin and Alessandro Triulzi
1996 *Being and Becoming Oromo Historical and Anthropological Enquiries*. Lawrenceville, New Jersey: Red Sea Press.
- Bernardi, Bernardo
1959 *The Mugwe, a Failing Prophet : A Study of a Religious and Public Dignitary of the Meru of Kenya*. New York: Daryll Forde.
- Berntsen, John Lawrence
1979 *Pastralism, Raiding, and Prophets: Maasailand in the Nineteenth Century*. University of Wisconsin-Madison.
- Cerulli, Enrico
1984 *Folk-Literature of the Galla of Southern Abyssinia*. School of Oriental & African Studies, London University.
- エヴァンス=プリチャード、E. E.
1995 『ヌアー族の宗教』上下巻、向井元子訳、東京：平凡社。
- 浜本 満
2001 『秩序の方法—ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』東京：弘文堂。
- 橋本栄莉
2011 「「真実」の転移と新たなリアリティ—南部スーダン、ヌエル社会における「予言の成就」の語りを事例に—」『くにたち人類学研究』6: 1–25。
- Hichey, Dennis Charles
1984 *Ethiopia and Great Britain; Political Conflict in Southern Borderlands 1916-1935*. PhD dissertation, Northwestern University.
- 保莉 実
2004 『ラディカル・オーラル・ヒストリー—オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』東京：御茶ノ水書房。
- 川田順造
1987 「アフリカにおける歴史の意味」川田順造編『民族の世界史12 黒人アフリカの歴史世界』126–154頁、東京：山川出版社。
1992 『口頭伝承論』東京：河出書房新社。
2004 『アフリカの声—「歴史」への問い直し』東京：青土社。
- Johnson, Douglas H.
1994 *Nuer Prophets*. Oxford: Clarendon Press.
- Leus, Ton
2006 *Aadaa Boraanaa: A Dictionary of Borana Culture*. Addis Ababa: Shama Books.
- Lamphear, John
1976 “Aspects of Turukana leadership during the era of primary resistance.” *The Journal of African History* 17(2): 225–243.
1992 *The Scattering Time: Turukana Responses to Colonial Rule*. Oxford: Clarendon Press.
- Lienhardt, Godfrey
1976 *Divinity and Experience : The Religion of the Dinka*. Oxford: Clarendon Press.
- 宮脇幸生
2006 『辺境の想像力—エチオピア国家支配に抗する少数民族ホール』東京：世界思想社。
- Mohammed Hassen
1990 *The Oromo of Ethiopia: A History 1570-1860*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大場千景
2006 『20世紀における南エチオピア牧畜民ボラナにおける文化変容』修士論文、京都府立大学。
- Oba-Smidt, Chikage
in printing “Historical memories concerning the Hayaana cult among the Boorana of southern Ethiopia, In Schirripa Pino (ed.) *Anthropological Sights on Ethiopia: Ongoing research in Social Anthropology* (Mekelle University Social Sciences Series 2) Berlin: Lit Verlag.
- Oromiyaa Finance Office
2007 *Census of Boorana Zone*. Yabello.
- Smith, Donaldson
1896 “Expedition through Somaliland to Lake Rudolf.” *Geographical Journal* 8: 120–137, 221–239.
1969 *Through Unknown Africa Countries: The First Expedition from Somaliland to Lake Lamu*. New York: Greenwood Press.
- Taddesse Berisso
1998 “The riddles of number nine in Guji-Oromo culture.” *International Conference of Ethiopian Studies Paper*, 141–164.
- 田川 玄
2000 『年齢体系と儀式—南部エチオピアのオモロ語系ボラナ人のガダ体系を巡る考察』博士論文、一ツ橋大学。

Local Techniques to Interpret Social Change

The Narratives in the Oral Chronicles of Boorana Prophets in Southern Ethiopia

OBA Chikage

The Graduate University for Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Regional Studies

The objective of this article is to describe how the Boorana people interpret events and construct their history, focusing on their oral traditions as retold by various narrators. Among the Boorana, an Oromo-speaking people of South Ethiopia and North Kenya, there are diviners called *raaga*. There are many oral traditions related to the *raaga* who tell about such historical events such as a big immigration, many conflicts, various disasters, and troubles within Boorana politics. It is said that the *raaga* have predicted historical events, advised people to perform ceremonies to get over social problems, and provided criticisms of society.

In this article, first I describe how that the activities of the *raaga* define and maintain the morale of the community while explicating several of their stories and prophecies. Then I analyze a number of their historical narratives related to the immigration in the mid-17th century, the big conflict with the Arsi people at the beginning of the 18th century, the conflict with the Arsi in the mid-19th century which killed almost an entire generation, the internal conflict at the end of 19th century, and the Menilek conquest also at the end of the 19th century.

In a discussion of some oral texts, I suggest that the stories of the *raaga* have become one of the bases for constructing the historical memory of the Boorana people. The narrators have related the results of historical events to the prophecies or magic of the *raaga* in order to explain them. When the Boorana construct their historical memory, they create a causal chain of events by reinterpreting prophecies of the *raaga* and making a bricolage of oral traditions related to these prophecies.

Key words: Boorana, prophecy, prophet (*raaga*), oral chronicle, historical practice